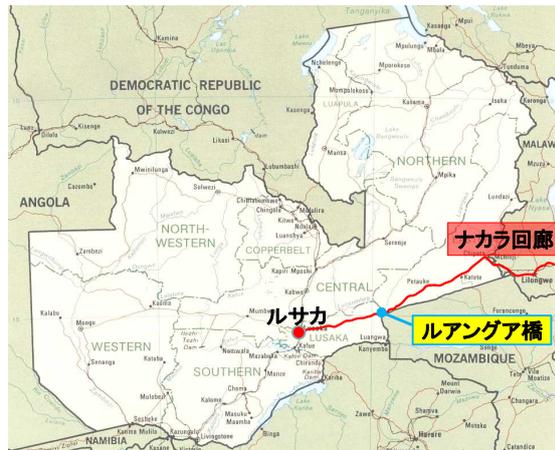


ザンビア便り第31回 「ナカラ回廊に架かる橋（ルアングア橋）」

ザンビアの首都ルサカから東にグレート・イースト・ロードを3時間走るとルアングア橋に到着する。途中ルサカ国際空港を通り過ぎるあたりまでは日本が無償援助で整備した舗装道路だ。そこから周りは田園風景に変わり、そのうちに丘陵地帯を縫うように道は走り、周りの風景も日本の山間地帯を抜けるような感じで美しい。私はある日、車でこの道を走り、ルアングア橋を見に出かけた。

この橋がザンビアにとって重要なのは、ナカラ回廊上にあるからだ。ナカラとはモザンビークの港町で、現在日本の協力で港の整備が進められている。モザンビークの沖合は石油や天然ガス採掘のプロジェクトも進められ、日本企業も参画している。この回廊は内陸国であるザンビアやマラウイにとって、物資を海まで運ぶ重要なルートとなる。日本は南部アフリカ開発を地域で進めていく方針でこのナカラ回廊周辺の産業開発、輸送手段の改善に関心を示している。



ルサカから走っていると、それほど交通量はない。見かけるのは大型トラックがほとんどで、ルサカからは銅のプレート、橋の反対側の東部州からはメイズや綿をルサカ方面に運んでいる。この街道はザンビアの東部州を横断してマラウイ、さらにモザンビークへと続いている。問題はこの橋の老朽化であるといわれており、私は自分の目で実情を見てきたかったのだ。

橋に到着すると、橋の手前に検問所があり、係官が常駐している。現在では大型トラックは一台ずつしか通していない。重量制限がしかれているのだ。橋を歩いて渡ると、路面のひび割れ、ゆがみが肉眼でもわかる。さらに河原において下から見上げてみると橋の中央部分が少し落ち込んで見える。これは安全上問題があり、早急に対策が必要だと専門家も指摘していた。



検問所での通行規制



路面のゆがみ



河原において橋を見上げる



橋をつり上げているワイヤー

専門家の説明によると、この橋は1968年にデンマークがかけたものだが、橋脚が川岸に偏っていて、ワイヤーでつっているが橋の中央部分を適切につり上げられていないようだ。現在の交通量であれば何とかなるが、将来周辺の開発を進めて、物資の輸送が増えれば交通のネックとなることは明らかだ。日本の専門家が言うには、建設当時としては、画期的な技術だったようだが、設計に問題があったようだ。しかし、当時の経緯を示す資料も設計図も残っていないという。仮にこの橋を日本が手がけることができれば、日本の先進技術で完璧な橋を架けられるとのことだった。

橋の下を流れるルアングア川の水量は例年に比べてかなり少なく、河原が広く広がっている。しかし、周辺はのどかな、美しい田園風景が広がっている。視察を終え、ルサカに戻る車の中で、このナカラ回廊にかかるシンボリックな橋、是非とも日本の技術で掛け替えたいものだと感じた。



橋をバックに

平成27年8月21日
駐ザンビア特命全権大使 小井沼紀芳